

【研究ノート】

土地型社会の研究（第2回）

カミとカネのあいだ

渡辺 直行

はじめに

あるところに「○っかない」、「●んち」という2軒の食堂があった（○と●には適切と思われるひらがな各1字を入れてください）。切れの美がある名である。食堂ならではの哲学もある。「食う」はやがて「食われる（分解される）」であり、入力出力はやがて入力である。だから全ての食には吐き気が伴う、とある哲学者は言う（胃潰瘍かもしれない）。死へと生きる者の宿命である。

しかし生きる者は主語＝私である以前に述語＝土地である。だからその風景は生きる者の姿そのものである。そこに安らぐものは、死が概念であることを理解する。ところが国土交通省の『美しい国づくり政策大綱』（2003年）によれば、「美しさとはほど遠い風景になっている」。これは・・・、安らげない。

なお前回は冗長だった。今回からは要点だけ書く。

1. ゆるキャラのくに

全国的にゆるキャラブームである。ゆるキャラが各地で運動会をやりながら名誉市民にも一日所長にも土産にも神様にもなっている。その神様の最大の特徴は「欠点だらけ」にあるという。

ここに日本の伝統がある（例えば『古事記』）。外国の神様も日本ではゆるキャラになる（例えば七福神）。日本を破壊しにきたゴジラも気が付けば日本を救っている。そして「呉爾羅神社」のご神体になり、今では日比谷のゴジラ像が人々に微笑んでいる。そこに日本が世界に誇らないゆるさがある。これが日本の自然である。

2. 真理のくに

西洋の聖書の神は言葉である。だから運動会はやらない。その神はバレスチナから来た（元々はアフリカの異端神であったという）。人々は神との契約で勤勉になり、御心＝真理を求めて科学もする。その科学はイスラームからもたらされた（アリストテレスの「再発見」と言われるが、「再」ではないとも）。そして自然は対象になった。西洋が明治以降の日本のようになった。

3. カミからカネへ

西洋では理念が土着のものに溶け込んだため、土地の

風景は残った。しかし日本では多くの風景が概念になった。概念が世界になれば、死は概念ではなく事実になる。

死や穢れは古くはカネに化体された。それで東でも西でもカネは泉で清められ、そこから土地の様々なカミが生まれた。しかしカネはやがて土地のカミから離れて理念と結びつき、軍艦マーチを背景に弾き飛ばされるパチンコ玉のごとく、世界を飛び回るようになった。

4. 相対化と公共性

日本は偶然の美、無常、自然の営みを大切にす。西洋は必然の理、永遠、人工の計画を大切にす。それぞれ長所短所があり、相互参照が有意義である。例えば西洋のスポーツマンシップに学べばアンフェアな彼是を抑えることができ、日本の自然に学べば近代の理念、合理、計画などを相対化することができる。

異なる論理を認めるところに公共性が生まれるのであるから、ゆるさは公共性の揺りかごであり、理念、合理、計画への偏執は公共性の墓場である。

5. 美しくないということ

公共の利益という理念が公共性を衰退させ、理論的合理が現実の風景を崩壊させることがある。風景は作るものではなく出来るものであるから、肝要なのは理念ではなく自然（対象ではない自然）である。

もちろん理念とゆるさとの中間が大切だが、近代は理念に偏した。しかも「○っかない」、「●んち」など不定形ものを排除した。「美しい」は不定形である。

おわりに

件の食堂の看板をまた見てしまった。長年の風雨でペンキがゆるんだせいか、「○」が「わ」に、「●」が「ら」になっていた。はたしていずれが現実か。それを問うのは無意味だというのが、東洋の古い教えである（ちなみに、前者は北の食材を使っており、後者は特定の食材を使っていなかった）。

[わたなべ なおゆき]

[土地総合研究所 理事兼調査部長]